

國學院大學学術情報リポジトリ

大学院短期招聘研究員講演会紹介

郭驥氏(中国・上海大学博物館助理)

中国における大学博物館の概況/上海地域の博物館概況

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 豊, 張, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001466

大学院短期招聘研究員講演会紹介
郭 驥氏（中国・上海大学博物館助理）

中国における大学博物館の概況

／上海地域の博物館概況

青木 豊（翻訳：張 哲）

はじめに

中国の博物館は、主に総合系、歴史系、芸術系及び自然科学系に分けられており、広義の博物館として美術館及び科学技術館も含まれている

中国では、2016年までに登録博物館が4,873館、美術館が418館設置されている⁽¹⁾。近年、私立博物館が急速に増加した結果、私立博物館が1,297館存在しており、全体の17.2%を占めている。つまり、公立博物館は依然として圧倒的に多く、国家の各部門及び機構に所属する国立館、省立館、市立館、区立館、県立館、大抵の大学博物館、人物系記念館、遺跡博物館及び各種の専門博物館は公立博物館であることが殆どである。現在、中国では、4,000館を超える博物館が無料開放されている。

1 中国における大学博物館の概況

中国の大学博物館は、近代教育事業が発足したと共に出現したものと思われる。清朝末の科挙で状元の称号を得、中国近代実業家・政治家・教育家であった張謇は、1902年に江蘇・南通で通州師範学校を開校した。この学校は、中国近代師範教育の先駆的な存在と言って過言ではない。1905年、張は通州師範学校で南通博物苑を設立した。同苑は、総合的百科事典式の博物館であり、収蔵品は天産、歴史、美術及び教育の4種に分けられていた。当時張は、博物苑をつくる目的を師範学校における教学の補助と市民の学習場所として使用すると表明していた。

1. 中国における大学博物館の発展過程

20世紀前半、中国近代教育事業が発足したと同時に、多くの博物館、図書館がつくられるようになった。当時の博物館は教育部管轄であり、ほとんど高等教育機関に属するか図書館と同じ建物を共用していた。その中でも大学博物館は、交通大学北京鉄道管理学院博

物館（北京、1913年）、華西協合大学博物館（四川、1919年）、嶺南大学博物館（広州、1923年）、厦門大学国学研究院陳列部（福建、1926年）、武漢大学生物館（湖北、1929年）、上海中西学院医史館（上海、1938年）などが誕生し、展示テーマ及び収蔵内容は所在する大学の学科と深く関わっていた。近代中国における著名な教育家である蔡元培は、積極的に大学博物館を設立すべく、博物館は学校と「同様な機能を有し」、「教育機能を重視」するといった共通点を持ち、博物館は科学及び美育に重点がおかれるべきであることを述べた。また、大学を国立大学と省立大学に分け、国立大学は全国的な学術に造詣の深い中枢として歴史、美術、科学系などの博物館を設立すべきであると主張した。

中国における高等教育⁽²⁾の体制は、ソ連を参考に1950年代初頭から大幅な調整が行われた。しかし、理念の欠如、資金、専門職員などの不足などの様々な問題から大学博物館の設立が停滞した時期でもあった。それまでに設立された大学博物館においても変化を来しており、例えば北京大学博物館は教学標本陳列室に改変されたほか、燕京大学史前博物館のように専攻の調整に伴い廃館となった例もある。1950年から60年かけて、政府に於ける博物館の管轄は教育部から文化部に移り、博物館の役割も文物保護に重点が置かれるようになった。高等教育に資する役割を持った大学博物館は、博物館業界の主流から外され、専門性の強い地質系及び中国医学系の博物館30館程度が遺存することとなった。

1980年代以降、改めて大学博物館設立の機運が高まり、大学博物館が増加する傾向が見られる。しかし、博物館の種類の多くは相変わらず専門性が強い館種であり、また職員の多くも当専門に関連のある教員や科学研究者からの転職もしくは兼任の中小規模の博物館が主流であった。政府に於ける博物館を管轄する部署では、大学博物館を企業（専門）博物館として分類し、人件費など経費は所在する大学が担うこととした。また、予算不足の博物館は、社会からの経済的支援で経営が行われた。

大学博物館は、21世紀以降重大な歴史的発展機会に恵まれ、政府による中外文化、科学研究等の積極的な交流奨励に伴い、高等教育事業や文化事業が高度な発展する状況を迎えている。このため、大学博物館は、数の増加、規模の拡大、種類の多様化、社会からの注目など、様々な面において発展をはじめたといえる。1980年代には1年あたり2.9館、90年代には2.7館の増加数であったが、2000年代には年間80館を超えており、1年あたり8館のペースで大学博物館が設立されていたことが理解できる。

2. 中国の大学博物館の現状

国家文物局によって2008年に配布された博物館目録では、大学博物館の数は64館であり、『中国大学博物館志』（2007年）に記載されている大学博物館は90館である。中国博物館協

会大学専門委員会会員機構、全国大学博物館育人連盟会員機構などのデータを纏めると、現在中国の大学及び高等教育機構が有する博物館は300館近く存在すると観られる。中国では、2016年まで2,880校の大学が開校しており、在学生は3,699万人を超えている。換算すれば、平均的に10校に1館、約12万人の学生に対して1館を有する計算である。(中国において現存する博物館は5,291館であり、これは人口13.82億人中26.1万人に1館の割合である)。

(1) 大学博物館のテーマ

中国の大学博物館は、テーマが主に歴史系と科学技術系である。具体的に歴史系は多くが考古、文物をテーマとする博物館であり、科学技術系は生命科学、医薬科学、地球科学、工業技術、農業科学など専門博物館がほとんどである。

(2) 大学博物館の規模

規模としては、中国の大学博物館の多くは小型博物館⁽³⁾であり、全体の70%以上を占めている。中型の大学博物館は、広州中医薬大学博物館(19,200㎡)、成都理工大学自然博物館(17,000㎡)、東北師範大学自然博物館(14,700㎡)、中央美術学院美術館(14,777㎡)など、ほとんどが2005年以降に建設された博物館である。また、建築面積が20,000㎡を超える大型大学博物館は極めて少なく、現在建設中の山東大学(青島キャンパス)博物館(計画面積40,000㎡)、浙江大学博物館(計画面積25,000㎡)のみである。

(3) 大学博物館の収蔵品の数

中国の大学博物館は、収蔵品の数が1万点に達している館はほとんど見られない。長い歴史を持ち、収蔵品の数が全国上位にある四川大学博物館は約4万点、北京大学サックラー考古と芸術博物館は約1万点、豊富な標本の収蔵で有名な中国地質大学(北京)博物館は約5万点である。一方、自然科学系の博物館は収蔵品の数が比較的が多く、例えば河北大学博物館が約120万点の資料を所蔵しており、文物約9,000点、生物標本256,233点、脊椎動物約560種、鳥類標本257種、昆虫標本約8,000種が含まれる。西北農林科技大学博覧園では、昆虫標本120万点、植物標本55万件、動物標本10数万点が保存されている。

また一部の大学博物館の収蔵品は数が多いが、文化財の等級が非常に高い場合もある。例えば、吉林大学考古及芸術博物館の収蔵品は8,000点であるにもかかわらず、その中の国家一级文物は200点とその割合が高いことが窺える。

(4) 大学博物館の組織及び規範性公文書

2005年、中国博物館協会は「高等学校博物館専門委員会」を成立させ⁽⁴⁾、2011年10月まで116ヶ所の会員機構を有していた。同年、上海に所在する10館の大学博物館は上海大学民族文化博物館連盟を結成し、総合的な展示会を実施していた。

2011年5月、国家文物局及び教育部は共同で『大学博物館の更なる建設及び発展に関して』と題する通知を發布し、本通知では大学博物館を「現代教育の体系及び博物館事業の重要な構成部分であり、新たな人材を育成し、高等教育の現代化を実現する重要な機構である同時に、探究型学習、参加型教学、实践教学を展開する適切な場所、独創的な科学技術を発展するための重要な基地、公共文化サービス体系を構成し平和社会を作り上げる重要な要素でもある」と定義した。また、大学博物館の発展に関する研究及び企画力を強化し、収蔵品の基礎工作、社会サービス機能、組織の連携を強化するべきであると述べている。これをきっかけに、2012年5月30日、教育部思想政治工作司の指導の下、全国大学博物館育人連盟（NEAUCM）が成立した。同連盟の宣言では、大学博物館の存在意義を「十分に人材育成の機能を発揮し、文化的人材育成の新たなモデルを作り、大学の文化的伝承、都市文明建設の重要な役割を担うべきである」と定めた。同連盟は、創立会員は70館であったものの徐々に増加し、また、上海、北京、黒竜江、湖北では相次いで省、市レベルの大学博物館育人連盟が作られた。

（5）大学博物館に関する学術的研究

大学博物館に関する研究論文（学位論文を含む）は、現在まで1,000編以上公開されている。2000年以前に発表された論文は、年間10編にも至らなかったものの、2010年以降は年間100編前後あるいはそれ以上となっている。論文の研究傾向は、中国大学博物館の発展概況以外に、大学博物館の専門化、大学博物館と学園文化の関係、大学博物館の社会サービス機能、大学博物館と観光業との結合、大学博物館におけるデジタル化などが重要なテーマとして挙げられている。

出版物は、徐士進、陳紅京の『中国大学博物館志』（上海科技出版社、2007）、全国大学博物館育人連盟の『走進高校博物館』（上海交通大学出版社、2013）、『探秘高校博物館』（2014）、王訓練の『走進北京高校博物館』（地質出版社、2014）、郭驥、曹永均、馮志浩らの『高校博物館發展研究：以上海地区為中心』（中国文聯出版社、2016）、王琳媛等の『解密高校博物館：全国高校博物館文化育人發展研究報告』（上海交通大学出版社、2016）などがある。

また、関連の学術研究会も行われており、中国博物館協会所属大学博物館專業委員會は2年に1回「全国高校博物館學術検討会」⁽⁵⁾を開催し、專業委員會が『高校博物館通信』（半年刊）及び研究討論会の成果をまとめた論文集を刊行している。このほか、一部の大学博物館は、不定期に当館の貴重な収蔵品の図録を出版していることなど挙げられる。

3. 中国大学博物館の発展の背景

中国だけでなく世界の博物館界では、公益性と経済利益の相反する問題を抱えている。非営利機関である博物館は、建設及び運営に膨大な資金が必要としている。一方で、世界中多くの大学博物館と同様に、中国の大学博物館も資金と専門職員の不足、来館者が僅少であること等様々な問題を抱えている。

大学博物館は、博物館の中でも特別な存在であり、機能及び運営方式で他の博物館と相違点がありながら、大学博物館は独特な利点を持っていると考えられる。具体的に、(1) 大学は高等教育の場であり、自然に教育の雰囲気及び教学の中心区域として形成されている点、(2) 大学は学術研究の場でもあり、多くの学問分野を背景とした多量の学術資源を享受できる点、(3) 大学は、学生という優秀な資源を有し、大学博物館の観覧者および人的資源になり得るほか、学生は将来の博物館の観覧主体でもあるため、社会的な博物館理念の革新を推し進める存在になり得る点、(4) 大学周辺はコミュニティ環境が完備されており、博物館は教育の補助、関係機関と連携・情報交換ができる以外に、付帯する施設が整備されており交通の便が良いため来館者にとって便利である。

中国政府は、現状博物館の教育機能を重視する傾向にあるため、大学博物館は教育及び研究の優位性を活用し、博物館間の交流をさらに行う必要があり、方法としては以下の3点が列挙できる。

(1) 資源整備とその共有の基礎作り。

大学博物館は、通常規模が小さいため、仮に既存の大学間連携を利用するならば、資源の整合が容易にできるはずである。国家及び省市レベルの大学博物館連盟以外に、資源整合のための実務的協力や大学構内及び学術界への影響力を拡大可能な基盤が必要である。

(2) デジタル化の発展趨勢に適応する。

大学博物館の多くが中小型であるところから、先進的な技術を用いることで収蔵品及び展示方法の欠陥を補填できる。大学博物館は、博物館学の実践を行える場であり、大学の研究成果・革新的思想の導入や多専攻による連携が期待できる。

(3) 大学の支持のもとで政府と共同建設を実施する。

地方政府による文化・科学技術の開発には、とりもなおさず良質の資源が必要であり、大学博物館及び関係諸団体は専門的な知識・技術による支援が可能である。大学博物館は社会全体を対象とし、地方の文化事業や観光業と連携し、社会教育意識を高めることが肝要である。

2 上海における博物館の概況

1. 1949年（中華人民共和国成立）以前上海の博物館

上海は、中国では最も早く近代的博物館が出現した地域であるといえよう。清時代の同治7年（1868）、イエズス会の神父であった Pierre Heude は「自然歴史博物院」（Museum of Natural History）の建設を開始し、後にこの博物館は「徐家匯博物院」、「震旦博物院」と命名された。同治13年、英国アジア文会は、上海圓明園路（1886年博物院路と改名、今虎丘路）5号に「アジア文会博物院」を設立した。同博物館は、英国アジア文会中国支会に属し、後に「上海博物院」と改名された経緯がある。震旦博物院とアジア文会博物院は両者とも上海自然博物館の前身とされている。

中華民国22年（1933）、上海市は博物館開館の準備に着手し、民国26年に上海市博物館が開館した。当館は、上海江湾⁽⁶⁾の市中心区域に所在しており、建物は4階建てのコンクリート構造である。敷地面積及び建築面積は1,900㎡と3,400㎡である。当時の上海市博物館に収蔵されていた資料は、現在上海博物館および上海市歴史博物館に保存されている。

この他に、1949年以前に上海に位置した博物館は、警察博物館（1935年設立）と中華医学史博物館（1938年設立）が挙げられる。

2. 上海における博物館の発展

1950年代から1980年代の間、上海の博物館の発展は低調であった。1981年においても上海所在の博物館は僅かに5館であり、その内記念館が3館であった。1990年代から、博物館が次第に発展し始め、1990年代中期には上海に博物館16館、記念館28館が開館していた。2015年までに、上海市文物局に登録された博物館・美術館は125館であり、全国の2.6%を占めている。その中で、美術館は6館であり、全国の約1.4%であった。

2008年に国家文物局が制定した『博物館評価臨時基準』に基づき、総合管理及び基礎施設、収蔵品の管理や科学研究、展示や社会サービスなど様々な面で博物館が評価・評定され、博物館を一級、二級、三級の三等級に分類した。上海では、国家一級博物館が5館（全国130館）、二級博物館が6館（全国192館）、三級博物館が8館（全国408館）である。

（1）博物館の業務管理

上海の公立博物館は、文物局、教育委員会、民政局、機関事務管理局など異なる機構に管理されているが、博物館に関する業務はすべて上海市文物局の指導の下で行っている。

1949年、上海市文物管理委員会が成立し、上海市人民政府に属した。文物管理委員会には、その後弁公室、博物館記念館管理部、地上文化財保護管理部、考古発掘部、流失文物

管理部など部門が設けられた。その中で、1980年代末に設立された博物館記念館管理部は、博物館、記念館の業務に主として関わる部局である。2010年には上海市文物局が成立し、文物保護管理处、博物館管理处及び博物館6館、文物保護研究センター1ヶ所が所属している。博物館、記念館に関する業務を担当する博物館記念館管理部は、文物局の発足と同時に設置された博物館管理处に移行することとなった。

(2) 博物館の収蔵品の数

1981年当時、上海における博物館の収蔵品の総数は34.6万点／件であった。2006年の博物館収蔵品総数は75.7万点／件であり、貴重文物（一、二、三級文物）は18万点／件であった。2015年、博物館収蔵品の総数は236万点／件、貴重文物24.5万点／件と徐々にその数は増加傾向にある。

(3) 博物館の展示及び来館者数

1951年当時、上海に所在した博物館の年間来館者数は5万人であり、1981年には年間来館者数は75万を超える数に増加した。2006年時点の上海地域の博物館では、年間196回の展示活動を行っており、来館者数は1,114万人に達していた。2015年の展示活動は年間407回であり、来館者数は1,935万人であった。

(4) 博物館の専門職員

1949年の中華人民共和国成立以前、上海地域の博物館専門職員は約50人のみであったが、1990年中期には博物館専門職員は1,000人に達した。2015年末までに上海地域の博物館（美術館は含まれず）に在籍していた専門職員は3,117人であり、このほか5ヶ所の文物保護管理機構には専門職員が73人所属していたほか、文物商店1ヶ所に所属する専門職員は69人であった。

1990年代中頃、上海地域の文物・博物館系専門職員の内、高級職員（研究員、副研究員）は165人、中級職員（館員）は187人、初級職員（助手館員）182人であった。2006年は、高級職員が108人、中級職員が232人であった。2015年には、高級職員が222人に、中級職員が627人に増加した。

また、2015年に登録された博物館志願者数は4,398人となっていた。

3. 上海地区における博物館の発展に関する現状と課題

(1) 上海の博物館発展の概要と現状

21世紀初頭、上海市政府は街の文化作り及びサービス業の振興を志向すると同時に、2010年開催の上海万博（World Expo）と国際博物協議会（ICOM）を迎えるため、博物館を150館まで増加させる目標を表明した。2017年10月現在、建設された博物館は131館で

あり、上海市民の平均所有数は16万人に1館である。一人当たりの博物館平均所有数は未だに少ないほか、発展速度も全国の平均値に至っていない。

上海地区の博物館の種別は、専門博物館、名人故居記念館が大半である。同市では、町の歴史を紹介する博物館がいまだに存在しておらず（2017年完成する予定）、公立美術館も相変わらず少ない（中華芸術宮、劉海粟美術館、朱屺瞻美術館等数館のみ）。

一方、現在上海地域の多くの公立博物館は、一部移動不可の文物を除き無料開放を実施しているため来館者数が毎年増加している傾向にある。

（２）博物館発展の特徴及び今後の問題点

上海地域では、土地面積の制約から設置面積に合った博物館計画が策定されている館が多く、設計理念においても精緻さを追求している。近年は、公立博物館の経費が潤沢であるため、新館建設若しくは既存館のリニューアルが積極的に行われるようになっている。一方展示は、新たな展示手法や保存技術を活用し始めたが、資料の修復や専門的設備の購入など経験不足の面がまだ多いと看取される。

博物館の職員は近年徐々に専門化し、研究能力も上昇しているが、博物館全体は未だに研究に対する雰囲気や研究を奨励する機運が低く、継続的な研究を行うには良い環境ではない。また、最近では、オリジナル商品の開発や博物館のブランド化が注目され、新型メディアを用いて教育活動を宣伝することもよく見られる。しかし、職員によって使用者の積極的な参加を引き起こすための努力が必要であると筆者は考える。

現在、人物系記念館は観光業と連携し、毎年の来館者数は理想的な状態に達していると言えよう。一方、大学博物館は政府から注目を浴びているが、大学内部ではまだ影響力が不足であるといえる。また、一部の博物館は設置されたままの状況となっており、専門的な知識・技術による維持・管理や継続的な発展がなされていないことも問題点として挙げられる。

（３）博物館発展の展望

上海市政府は、今後浦東区で計画している上海博物館東館以外にも、周辺地域において大型複合的文化施設の建設も予定している。これからの博物館は、大学や科学研究機構との連携を強化し、研究員の研究能力を引き上げることを自らの任務と意識しなければならない。

また、同系統あるいは同地域の博物館において、幅広く地元の文化観光や学校の教育活動などと連携を図り、博物館における文化観光プランの策定などの積極的な実践が、社会及び博物館自身に必要であると筆者は考えるものである。

註

- (1) 日本の博物館数は、2017年までに5,682館である。野外博物館、動物園、植物園及び水族館がこの数字に含まれている。
- (2) 中国で述べる高等教育は、大学教育のことである。
- (3) 『博物館建築設計規範』によると、5,000㎡以下の博物館が小型館と設定されている。また、中型館は5,000から20,000㎡、大型館は20,000㎡を超えるものとされている。
- (4) 中国で述べる高等学校は、大学のことである。
- (5) ここにある高校は、大学の意味を指す。
- (6) かつて存在していた上海の県である。

